

インフルエンザ

赤谷慶子

毎年乾燥せる寒き冬の季節にインフルエンザは流行す。大体、ワクチンを施せば、軽く済むと言はるるあり、毎年十二月初旬にはワクチンを接種するを常とす。あまり早くワクチン打つと、二月より三月に最も流行る時期にその免疫失效するなり。ウィキペディアによれば、インフルエンザウイルスにより引き起さるる急性感染症をインフルエンザと呼びたり。多くは上氣道炎症狀・呼吸器疾患を伴ふにより流行性感冒とぞ呼ばれる。季節性インフルエンザには、A型、B型、C型の三種類あり。

不覺にも今年はB型にかかりき。ウイルス體内に入りてより二三日にて發症す。最初は夜中に九度の發熱ありて、翌朝近所の内科に診察を求むれど、検査は陽性にはならず、普通の風邪と診斷され、抗生劑等を貰ひ歸宅したりき。しかれど、熱は、あるいは九度に上昇しあるいは、七度台に鎮靜し、乱高下を繰り返す。月曜日に再度内科に診療を求むれば今度はB型の陽性反應出でき。イナビルといふ吸引する藥處方せられ、藥劑師見守るなか全八回吸引す。他に投藥はなかりき。帰宅するや熱は四十度になりたれど、夕方より下がり始め、翌朝には平熱になる。この藥の威力はいみじと思へど、人によりては身體全體に發疹を生ずる副作用あり。水曜日までは人との接觸は避くるやうにとの醫師の指示にて大人しく家にて仕事をしながら半分寝ねたりき。咳のみ残りて、他人に移す可能性ありたれば、人に逢ふ事極力控へたり。

比較的平熱の高き吾は、八度ほどなるが眠りにつきやすき温度にて、四十度の熱は何十年ぶりなるか記憶になき所なり。熱さはさほど苦にならざるも、熱下がりて後、難儀すること甚だし。足腰まるで登山せしやうに張りて、坐るも横たはるも痛み能耐へず、二日ほど大井町の整體師の所へ通ひき。院長は錦織圭の整體師にて、海外遠征の際には必ず同伴するとの由。伊達公子も現役のころそこへ通ひたる事聞き及ぶ。スポーツ整體なれば、若き人たち運動の故障にて通ふが常にして、高齢の患者は皆無なり。

(平成三十年二月二十一日受附)